HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	国際社会におけるアナーキー、周辺、介入 ： 植民地統治と平和構築
Author(s)	五十嵐, 元道
Citation	北大法学論集, 65(1), 180[1]-157[24]
Issue Date	2014-05-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56127
Type	departmental bulletin paper
File Information	lawreview_vol65no1_2.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論　　説

国際社会における
アナーキー、周辺、介入

—— 植民地統治と平和構築 ——[1]

五十嵐　元　道

はじめに

アナーキー（anarchy）という言葉は、古代ギリシャの政治思想から現在の国際関係論まで広く使用されてきた。特に国際関係論では、リベラリズム、リアリズム、コンストラクティビズムなどの理論的差異に関わらず、国家間の関係を捉えるための概念としてアナーキーが用いられてきた。ヘドリー・ブルの『アナーキカル・ソサエティ』やA・ウェントの「アナーキーは国家がつくり出すもの：権力政治の社会的構成」はその代表例である（ブル2000; Wendt 1992）。しかし、アナーキーという概念が国家間の関係だけでなく、国際社会の「周辺」を捉える概念としても用いられてきたことは、国際関係論のなかではこれまでほとんど注目されてこなかった[2]。国際社会の「周辺」がアナーキーとして表象さ

[1] 本稿については、「ヨーロッパ近現代史若手研究会」にて、渡辺昭一先生、浅岡善治先生、山口育人先生、溝上宏美先生、若松邦弘先生など参加者の方々から多くの有用なご指摘をいただいた。この場を借りて深く感謝申し上げる。また今回の掲載にあたり、査読をご担当いただいた匿名の査読者の先生にも心より感謝申し上げる。査読を通じて、本稿の理論的問題点を修正し、議論をさらに前に進めるうえで、きわめて重要なご助言をいただいた。

[2] 本稿の問題関心に最も近いのが、B・シュミット（B. Schmidt）の研究（1998）

れることで、国際社会の中心をなす国々による周辺地域への介入と統治が構成されてきた。本稿は、これまでの国際社会の歴史のなかで、国家間関係を表象するアナーキー概念とともに、実は中心／周辺関係を構成する（別の意味内容をもった）「アナーキー」概念が存在してきたことを指摘し、その言説構造を明らかにする。

そこで本稿では、19世紀から現在に至るまでの国際社会の歴史のなかで、国際社会の周辺がアナーキーとして表象された際に、どのようにその性質が規定され、どのように介入・統治が構成されてきたのかを分析し、そのパターンの抽出を試みる。以下、まず政治思想としてアナーキーという概念がどのような性質のものであるのかを概観する（第一節）。それによって、「無秩序なアナーキー」と「秩序あるアナーキー」の二種類のアナーキー概念がこれまで存在してきたことを明らかにする。この区別に基づき、これまでの国際関係論が後者にばかり注目する傾向を示してきたことを指摘するとともに、国際社会の中心と周辺の関係の構成において、前者のアナーキーが重要な役割を果たしてきたことを明らかにする。第二節では、中心と周辺の関係を構成するアナーキーを分析するために、19世紀の植民地統治をめぐる言説を分析対象とする。特にその代表的な事例として、イギリス帝国において反乱後のインドがどのように表象され、どのように統治が（再）構成されたのかを検討する。その後、現在の国際社会における中心と周辺をつなぐアナーキーの概念を分析する。特に冷戦後に新たなアナーキーとして表象された「破綻国家」をめぐる言説と、それに対する（主に国連の）戦略を分析する（第三節）。以上の分析から、周辺地域が「無秩序なアナーキー」によって表象され、介入・統治が構成されてきたことを明らかにするとともに、国際社会に

だが、彼は、アナーキー概念に注目すると言いながら、「アナーキー」という言葉の使われ方に全く無頓着であった。それゆえ、アナーキーが政治学的にどういう言葉として使用されてきたか、また、アナーキーという言葉と周辺地域への介入や統治がどのように結びついてきたかなどについては、十分に分析していない。それは彼の問題関心があくまで国際関係論の成り立ちにのみあったためである。他方、国際関係論における主権国家間の関係を捉える「アナーキー」概念の意味について分析した重要な研究として、土山（2014）の第２章を参照されたい。

おいて中心／周辺関係が構成されるひとつのパターンを析出する。

本稿は、イギリスの植民地帝国の歴史と冷戦後の平和構築を結び付けるという意味で、国際関係論におけるポストコロニアル研究の一種である（この領域の代表的研究として、Gruffydd Jones 2006; Seth 2013）。しかし、幾つかの点で他の国際関係論のポストコロニアル研究と異なる。第一に、本稿はアナーキーとして表象される周辺および他者の「被害者性」の強調を避ける。他者の抑圧の側面だけに注目することは、他者の主体性をかえって無視する可能性がある。本稿が狙いとするのは、アナーキーという表象が「統治する側」と「される側」をどのように生成してきたのかを明らかにすることである。第二に、本稿は中心が周辺に対して行使する権力を過大視することを避ける。歴史的に見れば、イギリス帝国もアメリカも周辺に位置づけられた地域を思い通りに操作できたわけではない（トムリンソン2006）。権力が行使されているということと、支配が貫徹していることは別である。また、周辺をアナーキーの概念によって表象する過程が、一貫した戦略に基づくものとも考えない。本稿では、国際社会の中心地域がアナーキーの概念によって計画的に周辺地域への介入と統治を意図したとは考えない。むしろ本稿は仮説として、アナーキーとしての周辺は間主観的に構成されてきたと考える。それゆえ、ここでの目的は帝国的権力の分析というよりはむしろ、アナーキーの概念を手掛かりとして、国際社会のなかで中心／周辺の関係が構成される一種の「見取り図」を明らかにすることである。

ただし、本稿は国際社会におけるアナーキー概念を包括的に分析するものではない。あくまで本稿の分析対象は、国際社会における周辺地域を表象するアナーキー概念のみで、先進国（あるいは文明国）によって構成される中心地域を表象するアナーキー概念については分析の範囲としない。また、本稿は介入と統治の因果関係を分析するものではない。あくまで、周辺地域への介入と統治が構成される際の「見取り図」を、アナーキー概念を手掛かりに描くことを目的とする。その意味で、本稿の目的および射程はきわめて限定的なものである。

1．政治思想におけるアナーキー概念：ふたつのアナーキー

さて、そもそもアナーキーとはいかなる概念なのか。英語のアナーキー（anarchy）の語源は、ギリシャ語のアナルキア（anarkhiā）に由来する。an は否定の接頭辞で「無い」あるいは「欠如している」という意味で、archy とは「権威に基づき成立する体制」を意味する。したがって、「アナーキー」とは本来、権威に基づく統治の体制が存在しないという意味である。アナーキー同様、archy には異なる接頭辞が付くことによって、ハイアラーキー（hierarchy）、モナーキー（monarchy）、オリガーキー（oligarchy）、アウタルキー（autarchy）、パトリアーキー（patriarchy）などの言葉になる。

アナーキーは、古代ギリシャの政治思想からすでに否定的な意味合いで使用されていた。プラトンは『国家』のなかで、民主政の失敗として生じる状態をアナーキーと呼び、アナーキーが今度は独裁を生むと考えた（Plato 2000: Book 8）。アリストテレスの政治学も同様に、アナーキーは民主政の失敗に対する呼び名であった（Aristotle 1995: Book 5, Part 3）。ルソーの社会契約論においても、アナーキー（anarchie）は政府と人民の衝突による政府の解体の結果として否定的に使われている（Rousseau 1998: Ch. 3.1）。これらの文脈でのアナーキーは、混乱（confusion）を伴う無秩序（disorder）、および混沌（chaos）の意味に近い。

トマス・ホッブズは古代ギリシャの思想同様、アナーキーを民主政の失敗の結果としながら、他方、アナーキーの概念を暴力と結びつけた点で、非常に重要である。ホッブズは『リヴァイアサン』のなかで「自然な状態、すなわち完全な自由は……アナーキーであり、戦争の状態である」（Hobbes 2012: Ch. 31, para. 1）と述べている。ホッブズの思想におけるアナーキーは、人間の根本的な性質（自己保存を目指したり、他者を羨んだりする性質）によって引き起こされる。それは人間が相互に暴力を行使する状態を指し、無秩序は人間の財や生命を危険に曝す程度にまで深刻なものとなる。だが、それゆえにホッブズのアナーキーは社会契約に基づく中央集権的な秩序形成の契機をも含む。つまり、アナーキーは無秩序の渦中にいる人間によって自然に克服され得るもので、あくまで一時的なものとされる。

さらに、エドマンド・バークがフランス革命について見て取った状況も、混乱を伴う無秩序の意味でのアナーキーだった。バークは、フラン

ス革命の結果、「法律は転覆されて裁判所は廃止され、産業は活力を失い、通商は途絶え、国の税金が支払われないので国民は窮乏にあえぎ続け、教会は略奪されたが国家は少しも潤わず、民事軍事の両面のアナーキーがこの王国の憲法になり……」(Burke 1910: 36-37) と述べている。

このように否定的な意味で用いられていたアナーキーを逆に肯定的な状態として捉えたのが、19世紀のアナーキズムの思想家たちである。例えば、フランスの思想家ピエール・ジョゼフ・プルードン (Pierre Joseph Proudhon) は、中間団体から構成された、単一不可分な主権が存在しない秩序をアナーキーと呼び、積極的に評価した。それゆえに彼は「アナーキズムの父」と呼ばれた (メイヤー 1953: 112-132; 谷川1983: 第４章)。プルードンの思想はバクーニンやクロポトキンといったアナーキズムの代表的理論家に大きな影響を与えた。バクーニンやクロポトキンはそれぞれの理論的方法によって、人間を国家ならびに資本主義から解放し、人間が本来持つべき真の調和を実現しようとした (ウドコック 1968: ６、７章)。彼らにとっては、一部に集中した権力こそ、問題の根源だったのである。

これとは異なるかたちで、アナーキーを暴力や混乱から切り離して論じたのが、イギリスの社会人類学者 E･E･エヴァンズ･プリチャード (E. E. Evans-Pritchard) である。彼は『ヌアー族：ナイル系一民族の生業形態と政治制度の調査記録』のなかで、「ヌアー族は政府をもたないが、彼らの状態は秩序あるアナーキー (ordered anarchy) として叙述できるかもしれない」(Evans-Pritchard 1940: 5-6) と述べている。すなわち政府がなくても、人々が無暗に闘争したり、不必要にお互いを傷つけたりしないひとつの秩序、すなわち「秩序あるアナーキー」が存在すると彼は考えた。

よく知られているように、このエヴァンズ・プリチャードの「秩序あるアナーキー」を国際関係の分析に応用したのが、英国学派の祖のひとり、ヘドリー・ブル (Hedley Bull) である。彼は世界政府のない主権国家からなる社会がアナーキーではあるものの、主権国家は一連の規範や制度に従い、ある程度一定した行動をとっていると論じた (ブル2000: 特に55-61)。すなわち、ここでのアナーキーは、中心的権威がないものの、アクターそれぞれの行動と相互作用が一連のパターンを構成し、予見可

能性が高い状態を意味する。また、国際関係論の理論的基盤の構築に最も寄与した理論家のひとりである、ケネス・ウォルツ（Kenneth Waltz）の理論は、国家間（ユニット間）の関係が中心的権威を欠いたアナーキーな状態であることに注目し、その構造からバランス・オブ・パワーとその崩壊のパターンが生じていると分析した（Waltz 1979）。この場合にも、ある種の自生的な（予見可能性が高いメカニズムという意味での）秩序が国際社会に存在していることをアナーキー概念によって明らかにしようとしており、その点でブルと共通する。このように、国際関係論ではしばしば「アナーキー」は一定の規則性をもった自生的メカニズムを捉えるための概念として使用されてきた[3]。さらに言えば、それは否定的な含意をもつ無秩序なアナーキーというよりは、むしろ、アクターの行動および相互作用の予見可能性が高い、秩序あるアナーキーである（若干繰り返しになるが、ここでの「秩序」という言葉は、暴力の不在を意味するのではなく、アクターの行動および相互作用が一定の規則を示し、予見可能性が高い状態にあることを意味するものとして用いる）。

語源に帰れば、アナーキーはあくまで単一の権威や権力を欠いた状態を意味する。それが暴力や混乱を伴うのか、あるいは何らかの規範によってアクター間の関係が安定するのかは、論者によって異なってきた。無秩序なアナーキーは、秩序構築の失敗の結果であり、混乱を生じ、場合によっては暴力の濫用が伴う。それゆえ、規範的には克服すべき状態が含意されている。他方、秩序あるアナーキーは、単一の権威や権力を欠いてはいるが、アクター間の関係は予見可能性が高いか、場合によっては調和的な状態を指す。暴力の行使が伴う場合でも、それはあるルールやシステムの範囲内で管理されている。それゆえ、規範的には根本的に変革すべき状態とは必ずしも言えない。それどころか、アナーキズムのように、一部の人間の手に集中した権力は必然的に暴走すると考えれば、

[3] アナーキーという構造によって、国家間の関係がどれほど敵対的になるかについては、国際関係論の論者によって程度が異なる。ここで問題にしているのは、国家の行動がアナーキーという構造的認識によって、一定の規則性（合理的に説明可能なメカニズム）を示し、予測可能性が高いと捉える（主に実証主義の）国際関係論の理論的前提である。

むしろ、アナーキーは好ましいと判断される。

国際関係論に限って言えば、主権国家間の関係を認識するうえでは、この秩序あるアナーキーにばかり注目が集まる傾向がある。しかし、これから明らかにするように、国際社会において中心／周辺の関係を構成する表象としてのアナーキーが必ずしもそうした意味であるとは限らない。それゆえ、アナーキーという言葉を検討する場合、話し手がこのいずれの意味でこの言葉を用いているのかに注目する必要がある。そこで特に注目すべきなのは、それが他のどの言葉や概念と結合し、ひとつの網の目を構成しているかである。それゆえ、本稿はアナーキーと結びついた一連の言葉と概念のネットワークに焦点を当て、アナーキーに関する価値判断についての含意を読み取る。以上をまとめると表１のようになる。

表１　２種類のアナーキー

アナーキーの種類	無秩序なアナーキー	秩序あるアナーキー
特質	混乱と横溢した暴力	アクターの行動の予見可能性が高い（あるいはアクターが調和的に共存）
規範的含意	克服すべき状態	維持可能な（維持すべき）状態
結合する言葉	暴力、混乱、混沌	予見可能性、安定、調和

２．植民地統治におけるアナーキー概念

では、これから国際社会の中心と周辺の関係の構成において、いずれのアナーキー概念がどのように使用されてきたのかを検討していく。アナーキーという言葉が国際社会の周辺に適用された代表的事例が、1857－1859年の大反乱後のインドである。1857年にインド北部で起きた蜂起は、凄まじい速さで他の地域での反乱につながった。そして、この一連の蜂起・反乱は、最終的に大反乱（The Indian Mutiny）として記憶されることになった。結論を先取って言えば、大反乱後のインドは否定的かつ固定的な意味での無秩序なアナーキー概念によって表象されたのである。

2－1　インドをめぐる言説

この大反乱は、イギリス帝国の政治家、官僚、知識人に大きな衝撃を与えた。それゆえ、大反乱勃発の直後から、それを分析した様々な著作が発表された。例えば、G・B・マレスン（G. B. Malleson）が『ベンガル軍の大反乱：歴史的説明』の最初の巻を出版したのが1858年６月で、反乱がまだ収まってすらいない状況だった（Chakravarty 2005: 19）。これに続いて、多くの著書が発表された。例えば、J・F・リー（J. F. Lee）とF・W・ラドクリフ（F. W. Radcliffe）による『インド大反乱、ラクナウ救援まで』、トマス・フロスト（Thomas Frost）による『インド大反乱の包括的説明：開始から現在まで』、E･H･ノラン（E. H. Nollan）の『インドおよび東洋のイギリス帝国の歴史：萌芽期から一八五九年のセポイの反乱の鎮圧まで』、R･M･マーティン（R. M. Martin）の『インド帝国、ベンガル軍の大反乱の解明』、さらにチャールズ・ボール（Charles Ball）による『インド大反乱の歴史』などが1857年から1861年にかけて、たて続けに出版されている。

これら一連の著作には否定的な意味を伴うアナーキー、ならびにそれと結びつく無秩序（disorder）や混沌（chaos）といった言葉が度々登場し、反乱時のインドの様子を表象している。例えば、フロストは、「〔インド〕北西部の各州は、ベンガルの各所同様、多かれ少なかれ、事実上アナーキーな状態にある」（Frost 1858: 26）と述べた。ボールもまた、「カルカッタからペシャワール、デリーからハイデラバードまで、インドは野蛮な闘争、アナーキー、無慈悲な虐殺の劇場と化した」（Ball 1858: 439）。アナーキーという言葉は使われていないものの、これと同様にマレスンも、ベンガル軍の蜂起により、「筆舌に尽くしがたい無秩序（disorder）、強奪、殺人といった光景が現れた」（Malleson 1858: 37）と述べ、反乱の結果、「完全な無秩序（disorder）に支配され、セポイはまさに勝手気ままにふるまい、ヨーロッパ人の住民たちの守衛になるどころか、恐怖になってしまった」（*ibid.*: 83）と論じた。こうしたインドの大反乱にまつわる著作のなかでも、19世紀後半、最も影響力があったのがJ･W･ケイ（J. W. Kaye）の『インドのセポイ戦争史1857-58』である。ケイもまた、インドにおいて「暴力とアナーキーが驚くほど突然に台頭した」（Kaye 1892 [1870]: II: 175）と語り、「ガンジス川周辺では、地域全体がアナーキーと

混乱（confusion）の状態にあった」（*ibid*.: 198）と述べた。

さらに、こうした一連の叙述以上にインド人を本質主義的に野蛮で暴力的な存在として描くものもいた。例えば、インドの植民地官僚だったF・O・メイン（F. O. Mayne）は、反乱の様子を次のように語った。

> パーグナー（Pergunnahs）〔地域〕では、知らせが野火のように広がり、あらゆる場所で村人が蜂起し、略奪や殺人をお互いに入り乱れて行った。古くからの敵意や長い間抑圧されていた報復の願望がただちに満たされた。債権者や法令で益される者たちが追い出され、旅行者や商人が略奪され、役人が命を奪われた。政府の建物、あらゆる所有物が略奪され、破壊された。あらゆる人々の攻撃が隣人に向かい、現地人たちは抑制のないアナーキーと反乱の狂気と自由のなかで我を忘れている。アジア人どもだけが、こうしたことに喜び夢中になるのだ。（cited by Wagner 2010: 216; see Roy 1993）

この報告のなかで、インド人は彼らの野蛮さゆえに暴力を振るったとされ、ただただ不合理で野蛮で暴力的な存在として描かれた。このように大反乱の間もそれ以後も、インドを暴力的なアナーキーとして語る言説が数多く出現した。ここでのアナーキーは、混乱や暴力を伴う、きわめて否定的な意味を持つ言葉であった。

２－２　分析と戦略の立案：間接統治のイデオロギー

このインドのアナーキーは、それまでの政治思想においてそうであったように、克服すべき対象となった。イギリス帝国では、インドをアナーキーとして叙述する流れから、そのアナーキーの理論的分析が始まり、新たな植民地統治の戦略が構成された。だが、ここで重要なのは、インドがヨーロッパとは異なる奇異で新しい何か、しかし同時によく知っている性質のものとされたことである。これがまさにエドワード・サイード（Edward Said）が「中間のカテゴリー」（a median category）と呼んだものである（Said 1978: 58-59）。イギリスの官僚や知識人は、ヨーロッパを参照しながら、インドの社会的性質を特殊だが、しかしヨーロッパの過去に属するものとして扱い、秩序に関する新たな視点を導入した。

大反乱の分析の理論的基礎を提供したのが、ケンブリッジ大学の法学の教授であり、インド植民地の総督府のメンバーだったヘンリー・メイン（Henry Maine）であった。彼は著書『古代法』と『東西の村落共同体』において、古代社会に関するモデルを提示し、それをインドとヨーロッパに適用した。それによれば、現在の東洋には古代社会が散らばっており（Maine 2009: 7）、それゆえ、東洋の共同体を分析すれば、古代社会の性質が分かるとした。メインによれば、古代社会では構成員が血縁に基づき、伝統的な社会システムによって統合されており、個人が共同体に先立って存在しない。それゆえ、所有権をはじめとする様々な権利が共同体に属する。しかしメインによれば、社会の発展のなかで、法が前提とする単位として、個人が徐々に共同体に取って代わる（Maine 2008: 79）。近代社会においては、「全ての関係が個人の自由な合意によって生じる。……唯一、契約だけがその法的妥当性を生み出す」（2008: 85）。この点で、社会は「地位から契約へ」（Maine 2008: 86）発展する。

当時のインドの村落共同体は原初社会の段階にあり、もうすぐ封建化の過程が開始するとメインは考えた（Maine 2009: 66-67; Maine 1888: 85）。封建化においては、「人間を結びつけていた『血縁』が消え、『領域』が人々を結合させる」（Maine 2008: 56-57）。こうした社会発展は、急激なものではなく、漸進的に進む（Maine 1888: 289-290）。もし社会の発展が急激に進んだ場合、インドの政治・社会システムは解体し、帝国の統治の安定性を脅かすことになるとメインは指摘した。インドの近代化は、J・S・ミルなどの自由主義者がそれまで推進していた戦略で（Jahn 2005; Pittz 2005: Ch. 5）、メインの理論はそうした自由主義者の議論を根本から覆すものであった。

急激な社会変革が大反乱を引き起こすとすれば、インドに固有な伝統的制度を保護することが重要になる。それゆえ、メインの理論はイギリス帝国のなかで教条化していく間接統治の原理を基礎づけるものであった。実際、インドの植民地官僚だったアルフレッド・ライアル（Alfred Lyall）は「ヘンリー・メインの知的後継者」（Mantena 2010: 165）とされた人物で、メインに倣い、伝統社会の重要性および保護を強く訴えた（Lyall 1907: 260, 263）。ライアルはインドの伝統社会が脆弱でイギリス帝国の保護を必要とすると主張した（Lyall 1907: 216, 219）。「伝統社会

が解体した場合に生じる空白をどのように埋めることができるのか」(Lyall 1907: 264) についての考えもなしに、その解体を許してしまうことはきわめて危険であると彼は警告した。そして、「政治的な制度が、蒸気機関のようにどこにでも移植でき、どのような共同体も益し、どのような気候にも耐えることができる」(Lyall 1893: 290) などと仮定することは間違いであると主張した。それゆえ、インドにおいては、西洋化された政治・社会システムの構築はインド社会の安定を脅かすものとされた。そこから「伝統的な」制度を保護し、イギリスの支配にあわせて改良し、存在しない場合には創造するという間接統治の戦略が理論的に再構成された (Mantena 2010: Ch. 5)。こうした戦略の大前提は、インドは自力では発展することが出来ず、伝統的秩序を維持することすら困難であり、常に混乱を伴う無秩序に陥る危険に満ちており、イギリス帝国が介入し統治し続けることが不可欠である、ということであった。つまり、イギリス帝国によって国際社会の中心から周辺へ秩序が拡張されるというイメージが構成されたのである。

このように、大反乱を契機にインドは克服すべき「無秩序なアナーキー」の場として表象され、伝統的できわめて脆弱な社会制度から成り立っていると分析された。インドが自力ではこの克服すべき状況から脱することが出来ないとした点で、このインドのアナーキーはホッブズの社会契約論のアナーキーと決定的に異なる。言説上、インドの無秩序なアナーキーは、新たな政治秩序の形成の契機を内在しておらず、それゆえに、イギリス帝国による介入と統治が正統化された。そして、インド社会の分析に基づき、近代化ではなく、「伝統」を利用した新たな統治戦略が登場したのであった。

表2　英領インドを表象するアナーキー

	英領インドを表象するアナーキー
特質	無秩序、混乱、暴力
規範的含意	克服は必要だが、自力での克服は著しく困難
処方箋	伝統的制度を利用した間接統治

3．冷戦後の国際社会のアナーキー概念

国際社会において、無秩序なアナーキーが周辺地域を表象するという現象は、冷戦後にも起きている。イギリス帝国においてインドという従属地域がアナーキーと表象されたように、冷戦後、アジア・アフリカの幾つかの地域も無秩序なアナーキーと表象された。けれども、冷戦後の場合、周辺地域は直接的に「アナーキー」とは呼ばれず、もっぱら「破綻国家」(failed states) として表象されてきた。「破綻国家」という言葉は、新しい無秩序なアナーキーの表象であった。結論を先取りして言えば、冷戦後も自発的に克服困難という否定的な含意をもつ、無秩序なアナーキーが周辺地域を表象してきたのである。

3－1 「破綻国家」をめぐる言説

1994年にジャーナリストのロバート・カプラン (Robert Kaplan) がアトランティック・マンスリー誌に発表した「アナーキーの到来」と題された記事 (Kaplan 1994) は、再び無秩序なアナーキーが周辺を表象し始める嚆矢であった。この記事は、シエラレオネをはじめとする西アフリカでは、人口の爆発や感染症の急速な拡大によって、政治秩序が崩壊し、深刻な犯罪が野放しになっていると指摘した[4]。カプランの分析は、人口爆発も感染症の拡大も西アフリカの自然信仰や一夫多妻制が遠因であるとしており、きわめて本質主義的なものであった。これほど本質主義的な言説は極端な例であるとしても、これと類似した言説は他にもあった。後にリベラル・ホークの代表的論者となるマイケル・イグナティエフ (Michael Ignatieff) も、1995年、途上国、とりわけアフリカやユーゴスラヴィアが「ホッブズ的な戦争状態」(Ignatieff 1995: 93) に陥っていると分析している。こうした言説は、アカデミアのなかにも散見される。例えば、1995年、ウィリアム・ザートマン (William Zartman) は、『崩壊国家：正統な権威の解体と再興』の序文のなかで、「崩壊国家」

[4]「西アフリカは、真に『戦略的な』危険としての犯罪的なアナーキーが生み出される世界規模の人工的、環境的、社会的ストレスの象徴になりつつある」(Kaplan 1994)。

(collapsed states) を「構造、権威 (正統な権力)、法、そして政治秩序がバラバラになり、古いか新しいか問わず、何らかのかたちで再構築すべき状況」(Zartman 1995: 1) と定義した。

90年代、国連もまた「破綻国家」や「崩壊国家」という言葉は明示しないものの、国家制度の「崩壊」を問題にした。ブトロス・ガリの『平和の課題・補足』(1995年) では、次のように論じられている。

> 〔内戦の特徴のひとつ〕が国家制度、特に警察や司法の崩壊である。これによって、ガバナンスの麻痺、法と秩序の崩壊、大規模な収奪、大混乱 (chaos) が起きる、政府の機能が停止するだけでなく、その財が破壊され、略奪される。そして経験を積んだ官僚が殺害されたり、国外へ逃げたりすることになる。(Boutros-Ghali 1995: para. 13)

このように「破綻国家」の概念は多くの理論家と実務家によって使用された。1990年代、再び国際社会の周辺が克服すべき「無秩序なアナーキー」として表象されたのであった[5]。

こうした「破綻国家」論が1990年代前半に登場した背景には、1991年からのユーゴスラヴィア紛争、同じく1991年からのシエラレオネ内戦をはじめとする西アフリカの紛争、ソマリアなどの東アフリカ内戦、冷戦時代から続いていたアンゴラやモザンビークといった南部アフリカの内戦などがあった。こうした内戦は、それまでの国家間の正規戦とは異なり、戦争法が無視され、民間人が主要な標的となり、より残虐な性質を

[5] 2000年代には、イラクやアフガニスタンが無秩序なアナーキーとして表象されている。例えば、イラクに関する研究で有名なトビー・ドッジ (Toby Dodge) は、論文のなかでイラクが (無秩序な) アナーキーに陥ったと指摘する (Dodge 2006)。また、対テロや対反乱活動の専門家であるブルース・ホフマン (Bruce Hoffman) もイラクは無秩序 (disorder) であると述べている (Hoffman 2006: 105)。また2006年には、イギリスのデイビッド・リチャーズ陸軍大将 (General David Richards) が「〔アフガニスタンの〕状況はほとんどアナーキーである」と語っている ('Afghanistan close to anarchy, warns general,' *Guardian*, 21 July 2006)。

備えた「新しい戦争」(new wars) として分析された。

「新しい戦争」論 (Keen 1998; Reno 1998; Chabal and Daloz 1999; Allen 1999; Kaldor 2001) によれば、1980年代、経済危機が途上国と旧共産国で起き、それが幾つかの要因によって最終的に国家の崩壊と内戦につながった。まず、旧共産国の多くでは計画経済が失敗し、国家の構造が弱まるなかで資源をめぐる競争が激化した。同様に、多くの途上国が開発の失敗や冷戦終焉に伴う米ソからの援助の減少によって債務危機に陥った。構造調整プログラムはこうした国々の脆弱な国家構造を掘り崩し、最終的に、国家を支えてきたパトロン・クライアント関係が崩壊してしまった。そして、軍閥をはじめとする様々なアクターが天然資源を求め、しばしば中央政府に抵抗し始めた。また民族・宗教アイデンティティが市民を兵士にするために利用された。こうした戦争では、民間人と戦闘員の区別はなく、暴力は社会の至る所に蔓延し、社会的弱者である女性や子供が犠牲となる。このように、「新しい戦争」論では、途上国の紛争に関して、グローバルな政治経済構造が主要な原因とされる。グローバルな政治経済と紛争の構造に注目する「新しい戦争」論は、出来る限り本質主義を回避しようとするが、結局のところ、欧米の主権国家モデルを分析の基準とし、奇異だがよく知っている (サイードが言うところの)「中間のカテゴリー」を構成した。そして、やはりこのアナーキーの構造も、現地社会が自力では脱することが出来ないものと認識された。

3－2　リベラルな平和構築とその修正

では、周辺地域のアナーキーに対して、国際社会はどのように対応すべきだと論じられたのか。1990年代初頭の最も顕著な反応は、国際社会はより積極的で長期的な介入、具体的に言えば国際的な暫定統治を行えというものだった。例えば、G・ヘルマンとS・ラトナー (G. Helman and S. Ratner) は「破綻国家がさらに出現することで、よりシステマティックで介入的なアプローチが必要になる」(Helman and Ratner 1992-1993: 7)と主張した。ここで言う「よりシステマティックなアプローチ」には、ガバナンス支援、統治権限の移譲、そして国連による暫定統治といった政策が含まれた。ヘルマンとラトナーだけでなく、「破綻国家」と「新しい戦争」を分析する様々な論者が処方箋として国際組織な

どによる暫定統治を正当化する（Krauthammer 1992; Lyon 1993; Mazrui 1994）。彼らは「破綻国家」の秩序を再構築するために、国連や先進国による暫定統治が最も効果的な政策であると論じた。

実務では、国連が現地での国家建設を支援する平和構築活動を推進した。そして、カンボジア、ボスニア、コソボ、東チモールでは実際に暫定統治が実施された。この時期の平和構築活動は、現地の紛争当事者間の和平合意の成立によって開始され、その合意の履行を主な目的とした。通常、平和構築活動では、現地武装勢力の動員解除、武装解除、社会復帰、さらに警察、軍隊などの治安部門の改革を行い、並行して紛争中の真実を究明し、現地社会の和解を促すための司法活動が実施された（篠田2003, 2013b）。こうした一連の活動は、リベラリズムの政治思想に基づいているため、リベラルな平和構築（liberal peacebuilding）と呼ばれる（see Heathershaw 2008; Newman 2009）。すなわち、選挙によって代表者を選び国会をつくり、法の支配の制度化によって個人の権利を保護し、自由市場に基づく経済制度を発展させるという国家建設のモデルを平和構築活動は前提としたのである。

ローランド・パリス（Roland Paris）は、平和構築が国際社会の主権国家モデルを周辺地域に伝播する機能を果たしているとして、平和構築を「新たな文明化の使命」と呼ぶ（Paris 2002）。篠田英朗（2013a）もこれと類似する歴史的な視点から、主権国家によって構成された国際社会が普遍化し、「平等で自律的な国際社会の構成国」という擬制を現実に近づけるために、紛争地域で国家建設が展開されていると分析する。篠田が「ブラックホール」（篠田2013b: 13）と呼ぶ周辺地域を国際社会が外部から秩序付ける行為こそ、平和構築なのだという。

だが、こうしたリベラルな平和構築は必ずしもうまくいっているわけではない。かつて植民地統治が完全な支配を達成できなかったように、平和構築も現地の社会改良にしばしば失敗している。それゆえ、リベラルな平和構築は多くの批判を受けるとともに修正案が示されてきた。1990年代末から失敗と成功を繰り返してきたシエラレオネの事例では、様々な修正案が出されるとともに、それが国連の平和活動の方針に大きな影響を与えてきた。そこでここでは、シエラレオネの事例を引き合いに出しながら、リベラルな平和構築活動の修正について概観してみたい。

修正案は大きく分けると二種類ある。第一の案は、平和構築の主体の権力を強化するというものである。具体的には、武力行使の制限を緩和し、より「強靭な」(robust) 平和活動にして、和平合意の離反者 (spoilers) を抑止しようとする案である。これは国連の『シエラレオネの平和維持活動の経験から学ぶべき教訓』と題された文書のなかで提案されるとともに、2008年の『国連平和維持活動:原則と指針』(通称、キャップストーン・ドクトリン) で採用された。また、前者の文書においては、「『破綻』国家では、価値のある天然資源の違法な採掘と紛争の間に直接の関連がある」と論じられており、シエラレオネをはじめ、西アフリカの国家の破綻への言及が見られる。幾人かの論者が指摘するように、90年代末のシエラレオネでの平和維持活動の失敗は、平和維持活動の強靭化につながった (山下2005; Holt and Taylor 2009)。

第二の案は、平和構築において、現地の「伝統的」な制度の利用を唱えるものである。2000年代後半のシエラレオネでの国家建設活動に関する論争の焦点のひとつは、現地の首長制度 (chiefdom) を改良強化すべきなのか、それとも自由民主主義的な制度の導入とともに廃止すべきなのか、というものであった (Richards 2005; Fanthorpe 2006; Jackson 2006; Sawer 2008)。現地の首長制度の利用は、すでに機能している既存の制度を利用することで制度改良のコストが下がるという利点、さらに外部アクターによる介入の度合いが下がるため、植民地主義的であるという批判をかわせる利点がある。他方、それに対する批判としては、現地の制度はそもそも、かつての植民地統治によって「創造」されたものではないか、というものや、現地の制度がリベラリズムや人権規範といった介入そのものを基礎づけている言説と矛盾する可能性 (例えば、女性の排除や抑圧など) がある、といったものが出されている。これは単に机上の論争ではなく、実践上のジレンマとなっている。また、シエラレオネに限らず、伝統的な制度の利用については、平和構築の研究者、ロジャー・マクギンティ (Roger Mac Ginty) もまた、リベラルな平和構築の有力な代替案になりえるかもしれないと論じている (Mac Ginty 2008)。実際、東チモール、アフガニスタン、ケニアでも伝統的制度を利用する平和構築の試みがすでに実践されてきたのである。特に、アメリカ軍によるアフガンでの活動では、現地の社会システムを文化人類学

的手法によって調査し、そのデータを戦略的に統治に利用している。この戦術は「人間地政学システム」(Human Terrain System) と呼ばれ、一部の文化人類学者が軍と協力してこのプロジェクトを進めている (Gilmore 2011)。

こうした植民地統治によって利用された首長制度を外部アクターが改良して国家のなかみ組み入れるという発想は、イギリス帝国が培った間接統治の原理を彷彿とさせる。欧米的なリベラリズムに基づく全面的な社会改良か、それとも伝統的制度の利用か。シエラレオネでの活動をはじめとする幾つかの平和構築活動は、イギリス帝国がインドで直面したものと類似の選択を迫られている。アナーキーに対する処方箋は、それを基礎づける理念のレベルでは、19世紀からそれほど進展しているようには見えない。

表３　冷戦後の周辺地域を表象するアナーキー

	冷戦後の周辺地域を表象するアナーキー
特質	国家の破綻、混乱、暴力
規範的含意	克服すべきだが、自力での克服は著しく困難
処方箋	リベラルな平和構築、 あるいは伝統的制度を利用した国家建設

結論

本稿は、国際社会における周辺地域を表象するアナーキーの概念について検討してきた。元々、政治思想においてアナーキーという概念は、主にふたつの意味で使用されてきた。第一に、政治制度の失敗の結果としての無秩序を意味し、混乱や横溢した暴力を伴うアナーキーである。第二に、単一の権威や権力に基づかない、多元主義的でアクター間の関係が一定の規則性を示す(ことによれば安定した)状態を指すアナーキーである。これまでの国際関係論では、主権国家間の関係を認識するうえで、主に後者のアナーキーにばかり注目が集まる傾向があった。これに対して、本稿では国際社会の中心と周辺の関係の構成を分析するべく、イギリス帝国における英領インドの事例と、冷戦後の「破綻国家」をめ

ぐる言説を分析し、国際社会の周辺地域が前者の無秩序なアナーキーによって、（自力では克服困難という意味で）固定的に表象されたことを明らかにした。イギリス帝国による植民地統治においては、従属地域としてのインドは、大反乱を経て、インド人も含め誰もが混乱し、きわめて暴力的な状態として本質主義的に語られた。そうした言説において、インドはそうした無秩序から自力で脱することは出来ないとされた。そして、この分析が伝統的な制度を利用する間接統治原理の理論化につながった。このような周辺地域を無秩序なアナーキーとして表象するという現象は、冷戦後にも生じており、その対象はアフリカなどの紛争地域であった。混乱と暴力と結びついた「破綻国家」という概念が、実務でもアカデミアでも使用され、周辺地域を表象した。「破綻国家」は自力では秩序の再構築が著しく困難であるとされ、外部からの介入が必要であるとされた。こうした表象に対応して、リベラルな平和構築が提案、実施されたが、その限界が明らかになると、平和活動の強靭化と伝統的制度の修正・利用というふたつの修正案が登場した。

ここで中心と周辺の構成に関するひとつの見取り図を描くならば、次のようになる。まず、ある特定の地域が自力では克服困難な否定的な含意の無秩序なアナーキーに陥っていると表象される。このアナーキーは理論化され、そこから当該地域に対して権力的に優位に立っている地域による介入と統治が処方箋として提示される。それが実践、修正、再構成されるという一連のプロセスを通じて、国際社会の中心と周辺が構成されてきた。

もちろん、中心／周辺の関係がこのプロセスのみによって構成されるということではない。あくまで、これは中心／周辺の関係が構成される複数のプロセスのひとつにすぎない。また、本稿は英領インドの統治と平和構築の差異を否定するわけでもない。特に、両者は時代が異なる以上、投入される資源の量や科学技術の質において全く異なっている。それでもなお、言説上の共通した構造は存在していると指摘したいのである。

本稿はあくまで19世紀英領インドに関する「アナーキー」をめぐる言説と、冷戦後の「破綻国家」に関する「アナーキー」をめぐる言説の構造を抽出し、比較したに過ぎない。それゆえ、アナーキーがなぜ介入およ

び統治に結びつくのか、という問いが残されている。この問題は本稿の射程を超えるものであり、この点については別稿（五十嵐（2014））に譲る。また序文で述べたように、本稿は国際社会の中心を表象するアナーキー概念についても考察の対象から外した。それゆえ、中心を構成する国家間関係を表象するアナーキーと、周辺を表象するアナーキー概念の関係（および歴史・思想的対比）については、次なる課題として残された。

最後に、以上の分析から、あえて19世紀の国際社会と冷戦後の国際社会の連続性に関する幾つかの示唆を引き出してみたい。第一に、周辺を無秩序で固定的なアナーキーとして表象し、外部からの介入と統治を正統化する言説と実践は、植民地統治の時代にすでに構成されており、特に新しいものではない。むしろ周辺地域を表象するアナーキーの概念は、植民地主義の時代と冷戦後の国際社会の連続性を示唆している。第二に、アナーキーの概念は、国際社会の中心（宗主国や先進国）による介入と統治を構成している点で、中心のヘゲモニーの一部をなしていると言える。ただし、それが中心による周辺の完全な管理を意味しているわけではなかった。第三に、中心地域は、周辺のアナーキーに対処するために、未だにリベラリズムに基づく社会改良と、現地の「伝統的」制度の修正・利用の間で彷徨っている。この点もまた、植民地時代と冷戦後の国際社会の連続性を示唆している。

参考文献

C. Allen, ‘Warfare, Endemic Violence and State Collapse in Africa,’ *Review of African Political Economy*, 26: 81, Sep., 1999.

Aristotle (Ernest Barker (tr.)), *The Politics* (Oxford: Oxford University Press, 1995).

Charles Ball, *The History of the Indian Mutiny*, Vol. 3 (London: London Printing and Publishing Company, 1858).

Boutros Boutros-Ghali, *An Agenda for Peace: Preventive Diplomacy, Peacemaking and Peace-keeping* (Report of the Secretary-General pursuant to the Statement adopted by the Summit Meeting of the Security Council on 31 January 1992): A/47/277-S/24111, 17 June 1992.

Edmund Burke, *Reflections on the French Revolution* (London: Dent, 1910).

Gautam Chakravarty, *The Indian Mutiny and the British Imagination* (Cambridge: Cambridge University Press, 2005).

Toby Dodge, 'War and Resistance in Iraq: From Regime Change to Anarchy,' in Raymond Hinnebusch and Rick Fawn (eds.), *The Iraq War: Causes and Consequences* (Colorado: Lynne Rienner Publishers, Inc., 2006).

E. E. Evans-Pritchard, *The Nuer: A Description of the Modes of Livelihood and Political Institutions of a Nilotic People* (Oxford: Clarendon Press, 1940).

Richard Fanthorpe, 'On the Limits of Liberal Peace: Chiefs and Democratic Decentralization in Post-war Sierra Leone,' *African Affairs* (January 2006) 105 (418).

Thomas Frost, Complete Narrative of the Mutiny in India, From Its Commencement to the Present Time (London: Read, 1858)

Jonathan Gilmore, 'A Kinder, Gentler Counter-terrorism: Counterinsurgency, Human Security and the War on Terror,' *Security Dialogue,* 2011 42: 21.

Branwen Gruffydd Jones (ed.), *Decolonizing International Relations* (Lanham, Md.: Rowman & Littlefield 2006)

John Heathershaw, 'Unpacking the Liberal Peace: The Dividing and Merging of Peacebuilding Discourses,' *Millennium - Journal of International Studies,* 2008, 36.

Gerald B. Helman and Steven R. Ratner, 'Saving Failed States,' *Foreign Policy*, Issue 89, Winter 1992-1993.

Thomas Hobbes, *Leviathan* (Oxford: Clarendon Press, 2012).

Bruce Hoffman, 'Insurgency and Counterinsurgency in Iraq,' *Studies in Conflict & Terrorism*, 29: 2, 2006.

Victoria Holt and Glyn Taylor with Max Kelly, *Protecting Civilians in the Context of UN Peacekeeping Operations: Successes, Setbacks and Remaining Challenges* (New York: United Nations, 2009).

Michael Ignatieff, 'The Seductivess of Moral Disgust,' *Social Research*, Vol. 62, No. 1 (Spring 1995).

Paul Jackson, 'Reshuffling an Old Deck of Cards? The Politics of Local Government Reform in Sierra Leone,' *African Affairs* (January 2007) 106 (422).

Beate Jahn, 'Barbarian Thoughts: Imperialism in the Philosophy of John Stuart Mill,' *Review of International Studies,* 31: 3 (2005).

Mary Kaldor, *New and Old War* (Stanford University Press, 1999).

Robert Kaplan, 'The Coming Anarchy: How Scarcity, Crime, Overpopulation, Tribalism, and Disease Are Rapidly Destroying the Social Fabric of Our Planet,' *The Atlantic Monthly*, Vol. 273 No. 2, Feb. 1994.

John William Kaye (Colonel Malleson (ed).), *Kaye's and Malleson's History of the Indian Mutiny of 1857-8*, Vol. II (London: W. H. Allen & Co., LTD, 1892).

D. Keen, *The Economic Functions of Violence in Civil Wars* (London: Oxford University Press, 1998).

C. Krauthammer, 'Trusteeship for Somalia,' *The Washington Post*, Oct 9, 1992.

Alfred C. Lyall, *Asiatic Studies: Religious and Social*, Vol. 1. John Murray, 1907.

Alfred C. Lyall, 'Life and Speeches of Sir Henry Maine.' *Quarterly Review*, Vol. 176, 1893.

P. Lyon, 'The Rise and Fall and Possible Revival of International Trusteeship,' *Journal of Commonwealth & Comparative Politics*, 31: 1 (March 1993).

Roger Mac Ginty, 'Indigenous Peace-Making Versus the Liberal Peace,' *Cooperation and Conflict*, 43, 2008.

B. Schmidt, *The Political Discourse of Anarchy: A Disciplinary History of. International Relations* (Albany: State University of New York, 1998).

Henry Sumner Maine, *Ancient Law* (South Dakota: Nu Vision

Publications, 2008 [1861]).

Henry Sumner Maine, *Lectures on the Early History of Institutions* (New York: Henry Holt and Company, 1888).

Henry Sumner Maine, *Village-communities in the East and West* (General Books, 2009 [1872]).

G. B. Malleson, *The Mutiny of the Bengal Army: An Historical Narrative* (London: Bosworth and Harrison, 1858).

R. M. Martin, *The Indian Empire: History, Topography, Geology, Climate, Population, Chief Cities and Provinces*, Vol. 3 (London: The London Printing Company, ltd.,1861).

A. Mazrui, 'Decaying Parts of Africa Need Benign Colonization,' *International Herald Tribune* (4 August 1994).

Edward Newman, '"Liberal" Peacebuilding Debates,' in Edward Newman, Ronald Paris, Oliver P. Richmond (eds.), *New Perspectives on Liberal Peacebulding* (Tokyo: United Nations University Press, 2009).

Roland Paris, 'International Peacebuilding and the "Mission Civilisatrice,"' *Review of International Studies,* 2002, 28.

Jennifer Pitts, *A Turn to Empire: the Rise of Imperial Liberalism in Britain and France* (Princeton: Princeton University Press, 2005).

Plato (G.R.F. Ferrari (ed.), Tom Griffith (tr.)), *The Republic* (Cambridge: Cambridge University Press, 2000).

William Reno, *Warlord Politics and African States* (Boulder: Lynner Rienner, 1998).

Paul Richards, 'To Fight or To Farm? Agrarian Dimensions of the Mano River Conflicts (Liberia and Sierra Leone),' *African Affairs* (October 2005) 104 (417).

Jean-Jacques Rousseau, *Du Contrat Social* (Paris: Serpent á Plumes, 1998).

Tapti Roy, 'Visions of the Rebels: A Study of 1857 in Bundelkhand,' *Modern Asian Studies,* Vol. 27, No. 1, Feb., 1993.

Edward Said, *Orientalism* (London: Routledge and Kegan Paul, 1978).

Edward Sawyer, 'Remove or Reform? a Case for (Restructuring) Chiefdom Governance in Post-Conflict Sierra Leone,' *African Affairs*, 2008, 107 (428).

Sanjay Seth (ed.), *Postcolonial Theory and International Relations: A Critical Introduction* (London: Routledge, 2013).

Donald Snow, *Uncivil Wars* (Boulder: Lynne Rienner Publishers, 1996).

Kim A. Wagner, *The Great Fear of 1857: Rumours, Conspiracies and the Making of the Indian Uprising* (Oxford: Peter Lang, 2010).

Kenneth Waltz, *Theory of International Politics* (Reading, Mass.: Addison-Wesley Pub. Co., 1979).〔河野勝、岡垣知子（訳）『国際政治の理論』（勁草書房、2010年）〕

Alexander Wendt, 'Anarchy is What States Make of It: The Social Construction of Power Politics,' *International Organization*, Vol. 46, No. 2 (Spring, 1992)

I. William Zartman, 'Introduction: Posing the Problem of State Collapse,' in I. William Zartman (ed.), *Collapsed States: The Disintegration and Restoration of Legitimate Authority* (Colorado: Lynne Rinner Publisher, 1995).

五十嵐元道「トラスティーシップと人道主義―介入と統治のための『装置』に関する系譜学的分析」『国際政治』175号、2014年３月

G・ウドコック（白井厚（訳））『アナキズムⅠ』（紀伊國屋書店、1968年）

篠田英朗『平和構築と法の支配』（創文社、2003年）

篠田英朗「国際社会の歴史的展開の視点から見た平和構築と国家建設」『国際政治』174巻、2013年 a

篠田英朗『平和構築入門：その思想と方法を問いなおす』（筑摩書房、2013年 b）

谷川稔『フランス社会運動史：アソシアシオンとサンディカリスム』（山川出版社、1983年）

土山實男『安全保障の国際政治学：焦りと傲り（第二版）』（有斐閣、2014年）

B・R・トムリンソン（渡辺昭一（訳））「二十世紀南アジアにおける帝国とヘゲモン」渡辺昭一（編）『帝国の終焉とアメリカ：アジア国際秩

序の再編』（山川出版社、2006年）
ヘドリー・ブル（臼杵英一（訳））『国際社会論：アナーキカル・ソサイエティ』（岩波書店、2000年）
J・P・メイヤー（五十嵐豊作（訳））『フランスの政治思想：大革命から第四共和政まで』（岩波書店、1956年）
山下光「PKO 概念の再検討：『ブラヒミ・レポート』とその後」『防衛研究所紀要』第８巻第１号、2005年10月